

トピック

攣縮性斜頸患者の鍼治療効果判定に ひずみ測定器が活躍

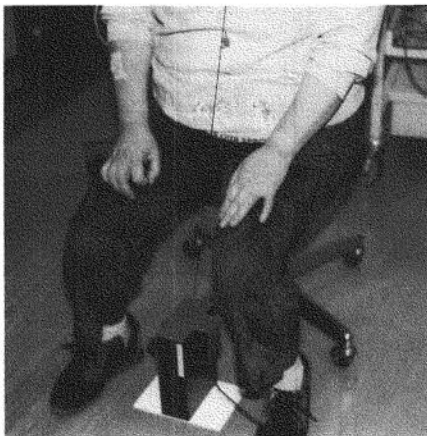
関西鍼灸短大・神経病研究センター

関西鍼灸短期大学・神経病研究センター(大阪府泉南郡熊取町)では、**攣縮性斜頸**患者に対して鍼治療をおこない、表面筋電図を用いてその効果を検討している。攣縮性斜頸は、頭頸部筋の筋緊張異常のため、頸部に異常姿勢や不随意運動を生じる疾患である。主に成人にみられ、心因、脳機能異常、向精神薬の長期投与などが原因であるといわれている。

その治療として、薬物療法、神経ブロック、外科的治療、自律訓練法などのような西洋医学的治療が主流である中で、鍼治療という東洋医学的治療をおこない、系統的に検討している研究機関は他に例を見ない。これまで、主に表面筋電図によって鍼治療の効果判定がなされてきたが、ポテンシオメータを応用したワイヤ式変位計および動ひずみ測定器を併用することによって、さらに詳細な検討が可能となった。

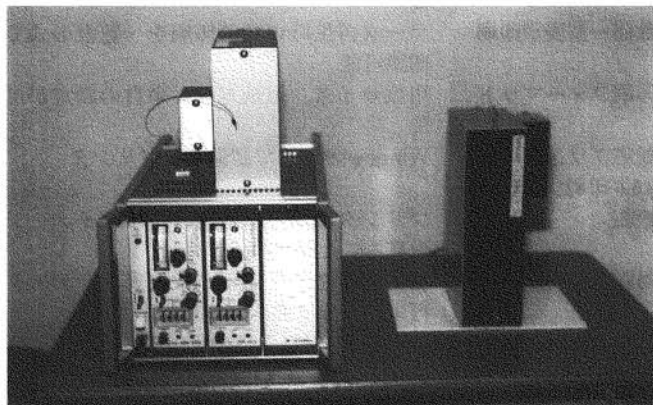
同センターでは、患者の症状を神経学的、筋電図学的に評価し、その結果に基づいて鍼治療方針を決定している。神経学的評価は、安静時の頸部姿勢、不随意運動の程度、頸部の可動域および日常生活状況などからおこなう。筋電図学的評価は、安静時および頸部の右回旋、左回旋、前屈、後屈、肩甲帯挙上の、各動作時の表面筋電図を分析しておこなう。表面筋電図は、筋電計(Nicolet社製バイキングⅣ)を用いて、坐位姿勢で左右の胸鎖乳突筋、僧帽筋、板状筋から記録する。鍼治療は、以上の評価の結果から障害筋を同定し、障害筋そのものに対してではなく、上に上肢にある経穴に対しておこない、これまで約75%の症例に効果が認められている。

現在は上記に加えて、表面筋電図の記録と同時に、ワイヤ式変位計(測定範囲±200mm(株)共和電業製 特別注文品)を2台使用して、それぞれのワイヤ端を患者の頸に装着し、縦および横方向の移動を測定している。変位計の出力は、動ひずみ

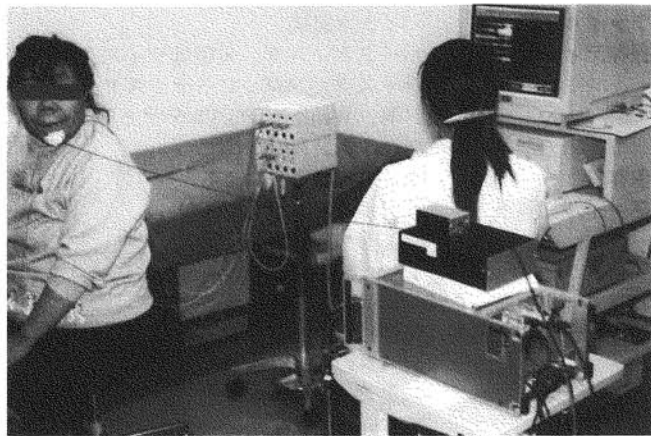


縦方向可動域測定用ワイヤ式変位計

測定器(DPM-601A(株)共和電業製)を経て筋電計の外部入力端子に入り、表面筋電図と同一画面上で頸部の動作を確認することができる。この方法で、安静時頸部姿勢の偏倚はもちろんのこと、頸部動作のタイミングおよび可動域まで筋電図波形と同期させることができ、さらに詳細に障害筋を同定することが可能となった。両機器には今後も、鍼治療効果の向上を支えて行くことが期待される。



ワイヤ式変位計と動ひずみ測定器(DPM-601A)



筋電計と横方向可動域測定用ワイヤ式変位計